

不確かな未来を前に

津守 真

小石を並べる

五月の末、四歳のE子がブランコの足台の上に小石を積んでいた。ときどき庭の真ん中に歩いて行くが、また小石のところに戻ってくる。E子が去った間に、私は隣のブランコの上に同じように小石を一握り置いてみた。E子の小石は、下側が平らな石であることに私は気が付いていたので、似たような小石を拾ったつもりだったが、E子は私の石をひとつひとつひっくり返して見て、光った石や丸い石は捨て、下側が平らなただの石をひとつだけ取り上げて自分の石に加えた。私は、E子が以前にきれいな色のビー玉を並べるこ

に凝っていたことを思い出した。だれかがつまずいて崩すと激しく怒った。今回はただの石を一握り置いてあるように見えるが、E子の美的センスにしたがって秩序をつくっていることは明らかだった。

並べることは秩序をつくることである。手は放しても、その秩序を保つことにより、自分の手に持っているのと同じことになる。こういうのを見ると、秩序はたんに倫理社会的なことだけでなく、持つことと手放すこととの相互作用を調節する人間の自我が関与していることが分かる。

E子はそれから幼稚部の部屋に走って行ったが、小石の一握りを両手で持って行き、床の上にさっきと同じ様に並べた。移動する度に小石を持ち歩く。階段の途中に小石を並べ、自分は手摺りの上に腹はいになり立ったりして遊ぶが、かならずまた小石のところに戻ってくる。こうしてあちこちで遊びながら二階の戸外のベランダに出た。小石を手摺りのわきのコンクリートの上に並べた。そして最後に私と滑り台を滑りおりた。E子は帰る前にベランダに並べた小石を屋根の上に落としていった。手に持った小石を手放し、今日つくった秩序を一度こわして、新しい歩みに自分自身を開いて帰るこの子どもに、私は精神の健全さを感じた。

同じ場を一緒にたのしむ

いつも私を見ると抱っこをせがむY子は、この頃、私のそばを通り過ぎて、自分の足で

ホールを走ったり跳んだりすることが多い。足の不自由なY子が両足跳びでホールのはしまで跳び、音楽と一緒に走るのを見るのはうれしい。この日も、朝登校したY子は私のそばを通り過ぎて自分の部屋に入って行った。母がゴールデンウィークに泊まりがけで家族旅行に行ったときの写真を見せてくれた。子どもはこういうときの写真を大好きである。

Y子がそれを手に取って見ると、傍らにいたN子もそれを取って見たい。ふたりで何度も取り合いながら写真を見た。Y子が去るとN子も追っていく。こうして一日に何度も二人は一緒になった。偶然に鉢合わせして、抱きついたこともある。帰りがけ、Y子が少し早めに母親と門を出て行くと、N子もそれを追って門の外へ出たがった。何としてでも一緒に行こうという力強さだった。私はN子の手を引いて一緒に門の外に出た。バス停でY子とN子とベンチに座り、バスを待つ長い時間、ふたりで顔を見合せて笑った。

Y子にとって、いまや他の子どもは自分のしたいことを妨げたり、持っている物を取り上げる者ではなく、一緒に同じ場で親しむ存在になっている。

保育者はその日、その時に、子どもが必要に答えて動くうちに、子ども自身が変化をつくりだしていくことがよく分かる。

この文章が雑誌にのるときには、これまで何度も書いてきたOME P 世界大会は終わっている。私共はいまはまだ、世界大会の準備に格闘中である。大きな仕事を前にして、不確かなことや心配が一杯ある。財政、人数、講演者が来られなくなったとか、地震、円

高、予想しなかった事態も起こるだろう。そのときそのときの判断がそれで良かったのかどうか、迷いも多い。しかし、成否は別として、これだけ多くの日本の保育関係者達がO MEP 世界大会のために、それが世界平和の一步であることを信じて、不確定な未来を前にして努力したことに意味があるのだと思う。

(愛育養護学校)

